

令和4年度ヒメトビウンカ薬剤感受性検定

長崎県農林技術開発センター病害虫発生予察室

1. 試験目的

長崎県における縞葉枯病の発生は、近年では平成20年が多発生であった。この年の発生要因としては、縞葉枯病を媒介するヒメトビウンカの土着個体群とは薬剤感受性が異なる海外個体群が多飛来したことによるものとされている。土着個体群と飛来個体群が交雑可能であることから、今後、薬剤感受性の動向に変化が生じることが懸念されるため、薬剤感受性を明らかにし、今後の防除対策の一助とする。

2. 試験方法

- (1) 供試虫：令和4年3月に長崎市手熊、佐世保市針尾においてヒメトビウンカを採集し、累代飼育1～5世代後の長翅雌成虫を用いた。
- (2) 供試薬剤：トレボン（エトフェンプロックス）、スタークル（ジノテフラン）
- (3) 検定方法：微量局所施用法による。バーカード社の手動アプリケータを用いて1頭あたり、0.08 マイクロリットルのアセトンに溶かした薬液を長翅雌成虫の頭部から胸部に塗布し、その後、少量の芽だしイネ苗と共にプラスチック容器に入れた。各薬剤処理24時間後に生死の判定を行い、苦悶して脚を動かすものつかまってはられない個体は死虫とした。なお1薬剤の反復は15頭前後×3反復とした。このデータをもとに、半数致死薬量（LD₅₀ 値）を算出した。



3. 結果

- (1) トレボン（エトフェンプロックス）

佐世保市針尾個体群の LD₅₀ 値は前年から増加し高く、感受性は低い傾向であった。

- (2) スタークル（ジノテフラン）

佐世保市針尾個体群の LD₅₀ 値は前年からわずかに高くなったが、感受性の低下は認められなかった。

長崎市手熊個体群の LD₅₀ 値は前年と変わらず、感受性の低下は認められなかった。

表 ヒメトビウンカに対する各薬剤の薬剤感受性

年次	採集		トレボン		スタークル	
	地域	月日	LD ₅₀	b	LD ₅₀	b
R4	長崎市手熊	3.2	—	—	7.8	1.4
	佐世保市針尾	3.3	89.2	1.8	5.4	1.1
(参考) R3	長崎市手熊	3.3	85.3	1.5	5.7	1.4
	佐世保市針尾	3.6	54.6	1.7	1.4	1.2

LD₅₀ 値の単位は μ g/g。 b はプロビット回帰曲線の傾き